

⑥ 職歴……東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム・助手、東京大学教養学部・特任講師、東京大学教養学部・特任准教授。

⑦ 現地滞在経験……ウズベキスタン（現地調査、三か月）。

⑧ 研究方法……政策決定者や外務官僚へのインタビューと現地出版されている研究書や資料の購入が現地滞在時の主な活動である。

⑨ 所属学会……日本国際政治学会、国際法学会、ロシア東欧学会。

⑩ 研究上の画期……二〇〇七年のウズベキスタン大統領選挙。選挙監視団（ウズベキスタン政府招聘）の一員として参加し、この国で選挙制度がどのように運用されているか、市民が（ソ連時代と違う）選挙制度をどのように理解しているかを目的にしたりした。移行国の民主化の測り方について考察を深めるきっかけとなった。

⑪ 推薦図書……塩川伸明『民族と言語——多民族国家ソ連の興亡Ⅰ』『国家の構築と解体——多民族国家ソ連の興亡Ⅱ』『ロシアの連邦制と民族問題——多民族国家ソ連の興亡Ⅲ』、いずれも岩波書店、Ⅰは二〇〇四年、ⅡおよびⅢは二〇〇七年。三巻をセットで読んでほしい。

⑫ 推薦する映画作品……『コーカサスの虜』（原題『Кавказский пленник』、セルゲイ・ボドロフ監督、一九九六年、ロシア）。

【エジプト】 革命とセクハラ ——エジプト映画『678』をめぐる

長沢栄治

最近のアラブ映画研究の進展は目覚ましい。パリのアラブ世界研究所などには立派なフィルム・アーカイヴがあるし、また現地でも俳優や作品の一覧など映画名鑑の類の出版も目立って増えている。日本でもアラブ映画研究の博士論文を書こうという大学院生も出てきている。本来なら本稿の執筆も筆者ではなく、こうした新進気鋭の若手研究者か、あるいは、もし存命であったなら畏友、故高野晶弘さん（現代アラブ文学研究者、二〇〇四年六月没）にお願いすべきところであつたらう。高野さんは以前、本誌の刊行

主体である京都大学地域研究統合情報センターの前身組織、国立民族学博物館地域研究企画交流センターが収集した現代エジプト映画の映像資料の整理と分析を依頼されたこともあった。彼のレベルに及ぶものではないが、代筆のつもりで執筆させていただく。

アジア・アフリカ諸国の中で、インドや日本と並び、エジプトの映画産業の歴史は古い。「エジプトの渋沢栄一」とでもいうべき民族資本家のタラアト・ハルブは、一九二〇年代に早くもこの有望な産業に目をつけていた。一九五二年の革命を経て、映画産業はアラブ社会主義体制のもとで国有化されたが、娯楽性の高い商業映画の製作は変わらずに続き、エジプトはアラブ第一の映画大国になった。エジプト映画隆盛の背景には近代演劇の発展という素地があったと筆者は見ている。その一方で、同じ中東地域で芸術性の高いことで知られるイラン映画にも十分対抗できる高品質の映画製作の伝統もしっかり維持されてきた。エジプトの映画監督と^{*1}言えば、国際的に知名度が高いのはユーセフ・シャヒーンである。しかし、高野^{*2}さんは、技巧性に優れたこの監督の作品には点が辛く、もう一人の巨匠で骨太のリアリズムの映像作家、サラハ・アブーセーフの方を「エジプトの黒澤」と呼んで評価していた。

筆者が映画館に通ってエジプト人の観客と一緒に映画を観ていたのは、はじめてエジプトに長期滞在した一九八〇

年代初頭の時期である。カイロの目抜き通りにある高級映画館シネマ・メトロから地方都市の場末の映画館まで、また作品の方もピンからキリまでだった。ただ奇妙なことに、記憶に残っているのはキリのB級映画の方である。脇役の老優が映画作中に急死してしまい、途中から別の俳優が声だけで代役を務めるといふ映画などは不思議によく覚えている。映画が作り直しにならなかったのは、経済性のためではなく、この急逝した俳優を追悼してのことだったと好意的に解釈することにしたが、それにしてもあまりにもエジプト的である。

ただエジプト映画の名誉のために言っておくと、ハリウッド映画の影響のためか、その後は技術も映像の内容も近代化、あるいはグローバル化が進んでいる。たとえば昔のフトウウワ（任侠）もの映画も、銃撃戦満載のスマートなギャング映画に変わってしまった。娯楽性は相変わらず高く、観客へのサービス精神も変わらないが、しかし昔のレトロな味わいが失われた。エジプト社会自身が変わってしまったのだからしかたがないことだろう。

短期の出張ばかりで映画館に行く余裕がない最近では、もっぱらエジプト航空などの機内サービスで映画鑑賞をするだけになった。そんな中、昨年の夏の帰りの便で出会った映画『678』は、地域研究にとって資料的な栄養価の高い秀作であった。映画のタイトルの6・7・8（シッ

タ・タマニヤ・サバア」とは公営バスの番号であり、このバスの車内で三人の女主人公の一人、公務員のファーズがセクハラ、つまりは痴漢に悩まされるというところから話は始まる。

エジプトのバスに関係する映画といえば、『バス・ドライバー』（一九八三）が有名である。米映画『タクシー・ドライバー』（一九七六年、ロバート・デニロ主演）のパロディーという感じがなくもないが、運転手が車内の不正行為について怒りを爆発させるというラストシーンは、門戸開放政策の導入によって混乱する社会の世相を十分に映しだしていた。B級映画としては、『婚礼の夜の涙』（一九八二）という作品もついでに思い出ししまう。フトウウワもので有名な名優フリード・シャウイキーが箱入り娘のバス通学を心配してバイクに乗せて送り迎えるシーンが出てくる。考えてみれば当時もかなりの満員バスであったが、今ほどのひどい痴漢行為はなかったように思う。ちなみに娘役を演じたのが、前出の『バス・ドライバー』の主演ヌール・シャリーフの奥さんである美人女優ブーシー、そして娘の恋人役を演じたのが、この映画の公開直後に事故死した伝説的なギター奏者オマル・ホルシード（タレント女優シェリー・ハーンの兄）であった。

映画『678』の内容については、朝日新聞の川上泰徳氏がウェブマガジン『ASAHI中東マガジン』で紹介し

ているので、その論説を参照していただければと思う。

筆者がこの映画に興味をもったのは、拙著（長沢二〇一一）でも述べたが、革命とセクハラの奇妙な関係をめぐつてである。革命の前年までは毎年、ラマダーン月の断食明けのお祭り（イードルフイトル）の夜、一部の羽目をはずした若者たちが集団セクハラを起こし、社会問題となっていた。ところが革命の年、二〇一一年には、この動きがぴたりと止んだという。セクハラに向かつていた若者たちのエネルギーが街頭での運動に発散されたと考えるのは少し安易かもしれない。しかし実際に、革命の山場では、熱狂的なサッカー・ファン（「ウルトラ」と呼ばれる）の若者たちが、日頃のサッカー場での警備の警官との応酬に「慣れている」ということから重要な役割を果たしたとも聞く。こうしたことを前提にして映画『678』を観ると、二番目の主人公で上流階級に属する工芸作家セバが医師の夫とサッカー場ではぐれてしまい、群衆の中で暴行を受けるというシーンが出てくるので複雑な思いがするのである。

筆者が昨年の夏、カイロに到着したのは、まさに断食明けの休みが終わった頃で、集団セクハラが再び始まったという記事、さらに各地で拡大していると憂慮する論説を新聞で目にした。地下鉄では、ベールをつけた女性警官が出勤して女性専用車両を厳しく監視していた。セクハラの復活は、革命の「ハレ」の季節が過ぎたことを示すものかも

しれない。しかし、エジプトの将来を決定づける現実の政治の動きは、その後も重要な展開を見せている。

映画を観て興味をもったので、セクハラ関係の新聞記事をチェックしてみると、断食月が始まる直前の七月に名門私大、カイロ・アメリカ大学的女子学生がキャンパス内で受けた痴漢行為を警察に訴えたというニュースがあった（『ミスリー・ヨウム』紙、二〇一二年七月二〇日）。彼女の写真も載っており、覚悟の行動である。映画『678』は、実際に起きた事件にもとづいている。映画のエンディングは、「ある勇氣ある女性がエジプトで初めて痴漢行為を裁判所に訴えた結果、セクハラに関する新しい法律が施行された。しかしその後、実際に訴えるケースは極めて稀である」という説明で終わっている。

この事件の勇氣ある女性をモデルとしたのが、映画の三番目の主人公、ネッリーである。彼女は民間企業のコールセンターで仕事をしているが、顧客のセクハラ電話に悩まされ（日本の場合も相当ひどいと聞くが）、男性の上司に訴えても相手にされない。鬱屈した気持ちで帰宅する途中で軽トラの運転手からセクハラに遭い、駆けつけた母親と一緒に文字通り車に体当たりして犯人を警察に突きだす。しかし、警察署の刑事からは世間体を気にするようにと諭され、また、テレビの討論番組に出演して訴えようと、男性の視聴者から侮蔑的な発言を浴びせられる。家族からは反対

されるが、最後は婚約者にも励まされて裁判所で告訴を決定するところで映画は終わる。

女性たちが自身が行動を起こさないと問題は解決できない、というのがこの映画のメッセージである。サッカー場で暴行を受けたセバは、セミナーを開いてこうした考えをセクハラに悩む女性たちに訴える。最初の主人公フアーズは、このセミナーに参加した一人であり、あるとき痴漢の犯人に頭衣を留めているピンで、さらにはナイフで反撃を試み、ついには警察も動きだす。彼女が行動を起こしたのは、痴漢を避けるために遅刻が多く、給料が減額された日の帰り道だった。また、バスに乗らずにタクシーを使うこともあり、夫の稼ぎが悪いこともあって家計が逼迫し、ついに子どもたち二人の学費が払えなくなる。

筆者が印象的に思うのは、このとき彼女が学校に乗り込んで、子どもたちが受けた罰と同じように、校庭で後ろ向きに壁に手を付けて「立たされる」恰好をする場面である。慌てた教師がなだめに来る、というシーンであるが、ここには自らの身体を人目に晒して、恥をかこうが何であろうが自分で行動するという強い意志が示されている。この映画『678』は、革命の前年、二〇一〇年の製作である。革命の最中、治安警察の隊列やスナイパーの銃弾を恐れずに街頭に練りだした若者たちの行動と決意の兆しを、早くもこの映画の中に見いだすことができるように感じた。

もう一つ印象的なのは、主人公三人がセクハラの横行する場所だとして、一緒にサッカー場に乗り込むシーンである。彼女たちは、国際試合の応援席から相手チームを励まし、「ザンビア、GO!」と大声で連呼する。周囲の男性のサッカーファンは唖然とするばかりである。革命では、まるでエジプト全体が国際試合のサッカー場のようになったかのように、ナシヨナリズムの熱情が噴出した。しかしより重要なのは、革命の経験は、映画の彼女たち三人のように孤立してでも、自分たちの意志を力強く表明する勇気を多くの人たちに与えたということである。二〇一一年に始まるアラブ革命は、世界各地で起きた民衆の直接行動に大きな影響を与えた。日本の反原発デモもその一つであった。

●注

- *1 一九二六―二〇〇八年。代表作は『アレキサンドリアW H Y』（一九七九）、『炎のアンダルシア』（一九九七）。
- *2 一九一五―一九九六年。代表作は『フトゥウワ』（一九五七）、『始まりと終わり』（一九六〇）。
- *3 <http://astand.asahi.com/magazine/middleeast/watch/201210290003.html>。

●参考文献

長沢栄治（二〇一一）『エジプト革命——アラブ世界変動の行方』（平凡社新書） 平凡社。

映画リスト

- 『678』……① *٦٧٨*、②ムハンマド・ディヤープ、③二〇一〇年、④エジプト、⑤アラビア語、⑥未公開。
- 『アレキサンドリアW H Y』……① *الاسكندرية*、②ユーセフ・シャヒーン、③一九七九年、④エジプト、⑤アラビア語、⑥劇場公開（一九八六）。
- 『婚礼の夜の涙』……① *دموع ليلة الزفاف*、②サアド・アラファ、③一九八一年、④エジプト、⑤アラビア語、⑥未公開。
- 『タクシー・ドライバー』……① *Taxi Driver*、②マーティン・スコセッシ、③一九七六年、④アメリカ、⑤英語、⑥劇場公開（一九七六）。
- 『始まりと終わり』……① *بداية ونهاية*、②サラハ・アブーセーフ、③一九六〇年、④エジプト、⑤アラビア語、⑥未公開。
- 『バス・ドライバー』……① *سائق الباص*、②アーテフ・タイイブ、③一九八三年、④エジプト、⑤アラビア語、⑥未公開。
- 『フトゥウワ』……① *فتوة*、②サラハ・アブーセーフ、③一九五七年、④エジプト、⑤アラビア語、⑥未公開。
- 『炎のアンダルシア』……① *الانفاس*（「運命」）、②ユーセフ・シャヒーン、③一九九七年、④エジプト、⑤アラビア語、⑥劇場公開（一九九八）、DVD販売。

著者紹介

- ①氏名……長沢栄治（ながさわ・えいじ）。
- ②所属・職名……東京大学東洋文化研究所・教授。
- ③生年・出身地……一九五三年、山梨県。
- ④専門分野・地域……社会経済史、エジプト／アラブ世界。

⑤学歴……東京大学経済学部。

⑥職歴……特殊法人アジア経済研究所研究員（二三歳）、同研究所副主任研究員（三八歳）、東京大学東洋文化研究所助教授（四一歳）、同研究所教授（四四歳）、同研究所附属東洋学
研究情報センター主任（四八―五一歳、任期三年）、同研究所副所長（五四歳、任期一年）。

⑦現地滞在経験……エジプト（アジア経済研究所海外派遣員・カイロ大学文学部社会科学大学院聴講生、二七歳、二年四月）、エジプト（日本学術振興会カイロ研究交流センター長、四四歳、一年間）。

⑧研究方法……個人史資料・活動家の証言集などのアラビア語文献資料を中心にした考察、関係者知識人とのインタビュ、農村聞き取り調査など、研究主題に応じた手法を取る。

⑨所属学会……日本中東学会、日本オリエント学会、日本イスラム協会。

⑩研究上の画期……一九七三年一〇月中東戦争と第一次石油危機。対象地域の研究を職業とするきっかけを作った。最初の長期滞在中に起きた一九八一年一〇月のサダト大統領暗殺。急激な社会変容と膠着した社会体制の間の矛盾が噴出した事件であり、この矛盾はその後も長らく解消されないうまま、最終的に今回の革命を導く背景となった。

⑪推薦図書……鈴木恵美編『現代エジプトを知る六〇章』（明石書店、二〇一二年）。

⑫推薦する映画作品……『壊された五つのカメラ パレスチナ・ピリンの叫び』（原題『Five Broken Cameras』、イマード・ブルナー&ガイ・ダビディ監督、二〇一一年、パレスチナ、イスラエル、フランス、オランダ）。

【イラン】 イラン映画の アイデンティティクライシス

鈴木 均

私はイラン社会を映し出すテキストとしてのイラン映画を研究的な関心から論じるということを、一九九六年一〇月に東京で行われた「イラン映画祭」を契機として意識的に行ってきた。イラン映画についてはだいたい一九九〇年代から二〇〇〇年代前半にかけての時期、重要な作品が次々と現われてきたと思う。イランは一九七九年に世界的政治的な潮流に多様な影響を与えた「イスラーム革命」を経験し、一九八八年のイラン・イラク戦争終結後、映画を含むさまざまな分野において次第に活動が活発になった。